

平成 30 年度 第 4 回兵庫県公立大学法人評価委員会 議事録

1 日時及び場所

- (1) 日時 平成 31 年 2 月 22 日 (金) 15:00～16:45
- (2) 場所 兵庫県公館第 2 会議室

2 出席委員

藤田委員、西門委員、西川委員、牧村委員

3 出席職員

(公立大学法人兵庫県立大学)

五百旗頭理事長、太田学長兼副理事長、伊藤副理事長、浅田理事兼副学長、高坂理事兼副学長、内布理事兼副学長、山崎副学長、戸田理事兼事務局長、藤原事務局副局長兼教育企画部長、松岡大学教育改革室長、行司社会貢献部長
(兵庫県)

山口企画県民部長、小橋管理局長、法田大学課長、中津大学課副課長

4 内 容

- (1) 開会
- (2) 挨拶
- (3) 出席者紹介
- (4) 議事
 - ・公立大学法人兵庫県立大学第二期中期計画(案)について
法人より資料 1-1, 1-2 について説明後、意見交換
 - ・平成 30 年度業務実績評価及び中期目標期間業務実績評価の実施要領(案)
原案どおり承認
- (5) 閉会

5 意見交換の概要(●: 委員、○: 法人又は事務局)

- 「国内外で自立し活躍する次代を担うリーダーを育成する大学」について私の会社経験から意見を述べる。

会社経営、特に製造業経営の立場からみると、理工系は、中堅以降になっても専門にこだわり過ぎ、自らの専門を背骨として背負い、ロジカルに定量的に捉える。文系は、専門が薄すぎ、直観的にイメージやたとえ話を多用して大掴みにとらえていく傾向にある。

しかし、経営層すなわち「幹」に入っていくと、理工系が今まで背骨だと思っていたことも、「枝」であったと気がつき、文系は言葉の言い換えで対応してきたと感じる。

企業の経営戦略にはグランドビジョンが重要である。新規事業の検討や新技術の開発においては、多くの専門を「束ねる」だけでは解決できない難しい課題が存在するため、トップがリーダーシップと決断力を持つ必要がある。そして、大胆なグ

ランドビジョンと強い意志のもと、会社を構成する多くのチーム全員が共通の将来ビジョンをもち、それぞれの立場で課題解決に努力をすることでシナジー効果を生む。まさに「チームで響き合う」ことがきわめて大事である。

大学では、専門を極めていくことは必須であるが、卒業後社会に出て新興国との大競争時代を生きていくためには、大学にいる間から「次世代リーダー」への最初のステップを踏んでおかなければならない。理工系は専門以外に大きな歴史観や国家観、日本の立ち位置の洞察など、大きな問題を考察するきっかけが、文系には産業や技術への親近感の醸成が必要である。

何よりもカルチャーが違う多様なメンバーが「チームで響き合い」全体最適を目指すという「次世代リーダー」となる最初の経験を積んでもらう場の提供が必要である。

以前にも申し上げたが、日本ではリーダー層育成の議論は多少はばかられてきた傾向があり、リーダーは自然に育つだろうとの考えがあるが、企業の経験からして真のリーダーは自然には育たない。欧米はもちろん、新興国でもリーダー層の教育に大変熱心である。もっとも、リーダーの育成とエリート育成とは異なることに注意しなければならない。

これまでのリーダーは、トップランナーの背中を見て追いかけていればよかったが、これからのリーダーには2つの資質が必要である。1つ目は小さな問題ではなく、大きな問題すなわちランドビジョンを考えることができる人材である。2つ目は、大きな変革、イノベーションを牽引できる人材である。マクロで捉え、大きなビジョンを描き、イノベーションを牽引できる人材が求められている。

これから世界に出ていく若者は、欧米はもちろん、エネルギーで競争にも強い新興国の若者と競争していくことになる。現状のままであれば、大きな壁に直面し、総崩れになっていく予兆を感じる。

兵庫県立大学が全国に先駆けて名乗りをあげ、リーダー育成の先陣をきるべきである。

- 日本には様々な専門家はいるが、真のリーダーはいないと感じている。これまで組織力等で成長できていたが今後は難しい。日本が日本らしくあるためにも、日本のリーダーが必要である。

グローバル化が進む中で兵庫県立大学がどのような方針のもとに大学運営をしていくのか。これまでから課題にあがっている「戦略的広報の展開によるブランド構築と知名度向上」について、ターゲットに応じて効果的に情報を発信とあるが、このもとになる大学のランドデザインが浮かんでこない。大学が目指しているランドデザインがイメージとなって発信されれば、大学の魅力が効果的に外部に伝わるはずである。

グローバル教育の推進において、海外からの留学生受入拡大をあげているが、量と

共に質の問題があると思う。どのように海外から優秀な学生を確保するかという戦略と留学生が母国に戻った時に海外とのネットワークを構築していく戦略が大切である。

- 東大や京大の学生であっても全員がリーダーシップをとれるわけではない。組織やチームといった環境のなかで人を巻き込む力を大学の講義だけで身につけることは難しい。リーダーシップを身につけるためには、現場に行つて様々な体験をすることが大切である。

- 今後学生が減っていく中で、大学が魅力を増して学生を惹きつけるかが重要であるが、具体的な学生数について記述がない。

大学の役割としてこれまでは18歳の人口を確保すれば良かったが、少子高齢化する日本において、学び直しの場合として40代から60代が大きなマーケットとなっている。教育のあり方として、今後、リカレント教育が重要となってくる。

理事長の発言にもあったが、グローバル化が進む中で国が発展していくためには人材の多様性が必要である。多様性を実現するための一つの方針として、留学生や海外からの教員が増えるように積極的に取り組んでいただきたい。大きな目標に向かって取組を進めていけば、数値目標は自然と達成できるので、引き続き努力していただきたい。

- 学生数についてご意見があったが、次期中期計画の評価指標の中で大学入学者志願者倍率として実績6.6倍を公立大学全国平均以上にするという目標をあげている。また、今年を集計によれば、7.4倍となり現行の計画の目標を上回っている。今まで色々な大学をみてきたが、比較的高いと思う。県立大学への入学を希望する者の数が教育内容充実の支えになればと思う。

- 文系、理工系の思考パターンについてご意見があったが、私も同意である。理工系は歴史や文化を深く理解し、文系は産業界のことを知ることが重要である。教養教育は重要であり、学内でも見直しを行っている。大綱化により教養教育と専門教育の区別がなくなったが、教養教育が専門教育の中に埋没してしまっている。教養教育が情報、コミュニケーション、英会話等のスキル重視の方向にいきすぎていると感じる。

我々は、兵庫県の公立大学として、特色のある先導的な公立大学を目指すことをキャッチフレーズとしている。兵庫県には先端的な研究基盤や神戸や播磨を中心とした歴史的な特色的な文化があるので、兵庫の強みを活かした教育と研究に取り組んでいく。また、SPring-8 やスーパーコンピュータ「京」を使った先端的な研究、国際商経学部や社会情報科学部の開設がメディアに取り上げられることによって、

兵庫県立大学全体のブランド力・イメージが向上していけばと考えている。昨年に比べ志願者数が 700 名も増えているので、一定の効果も出てきているのではないかなと思う。

リカレント教育については、MBA に対して社会人の希望者が定員の 2 倍以上あり、ニーズもある。また、独立研究科にも多くの社会人が在籍する。藤田委員の発言も参考にして取り組んでいきたい。

- 志願者のうち受験者数はどれくらいか。
- 入試制度として、前期日程、中期日程、後期日程を実施している。前期は 9 割以上、中期は 6 割、後期は 5 割程度が受験している。今年度はどの学部も昨年度に比べて志願者は増えている。

- 日本人の人間性は世界でも最も誇れるものである。これから先行き不透明な世界において、哲学や考える力が重要であると感じる。理事長の発言にもあったが、日本人の良さを育てる教育をしていただきたい。

- 今の学生は勉強をしすぎている感じを受ける。学生時代に勉強以外にも読書や旅行など色々な経験をすることも大切である。理事長のリーダーシップのもと上手く手綱を引き締めたり緩めたりして、さすが兵庫県立大学だと言われるような教育に取り組んでいただきたい。

- 普段の勉強は大切であるが、30 名の留学生との共同イベント、例えば 1 週間の合宿をする等、自分の力で何かをやっていくというような体験型の教育の機会を与えることもリーダーの育成にとって大切ではないかと考える。

- 広大な淡路緑景観キャンパスの活用について教えてほしい。

- 教員は景観園芸学校と兼務しており、合同でセミナー等を開催することが多い。学生数は入学定員 20 名と少ないが、学生は官公庁、建設業、設計事務所等に就職している。地域経営とランドスケープのセミナーを 5 回開催しており、500 名程度が集まった。また、地域の小中学校、保育所との連携事業や、大学全体の COC 事業の拠点となって、各キャンパスに出向いて講義をしている。平成 30 年度は特に国際的な事業を展開しており、国内外から有名な教員を呼ぶなどの活動をしている。見えにくいけど、様々な事業展開をしている。